

華岡青洲自筆「萬病一毒之説」考 —現代語訳および注解—

高橋 均 松村 巧*

近畿大学医学部附属病院救命救急センター
*和歌山大学教育学部中国言語文化研究室

抄 録

華岡青洲は江戸時代後期に活躍した外科医であり、世界に先駆け、麻沸散 (別名：通仙散) を用いて全身麻酔下乳癌摘出術を施行したことで知られている。華岡青洲自らが書き著した医学書は天理図書館所蔵の「乳巖治験録」のみとされてきた。今回、札幌華岡本家所蔵の春林軒家塾本の中から、華岡青洲自筆の「萬病一毒之説」が新発見された。この論考を全文書き下し文とし、現代語に訳し、注解を加えた。

Key words: 華岡青洲, 吉益東洞, 萬病一毒之説, 医学史, 江戸時代

緒 言

現在まで、華岡青洲自筆の医学書とされてきた書物は、天理図書館所蔵の「乳巖治験録」のみである。本論文で取り上げる「萬病一毒之説」という書物は、札幌華岡本家所蔵の春林軒家塾本の中から、故宗田一氏が新発見されたもので、天理図書館所蔵本以外では初の華岡青洲自筆本である。その発見は朝日新聞の全国版にて大きく取り上げられたものの、その内容は解説されないまま経過してきている。本論文ではその文意を解説し、現代語訳とし、解説を加える。

資 料

原書は和綴じ、四葉の冊子である。札幌華岡青洲氏が所蔵されている。図1に本文の全文を示した。

本書の現代語訳は、できるだけ原文の表現に沿った。書き下し文ならびに現代語訳では読みやすいように適宜段落やかっこを設けた。注釈も訳者によるものである。

原 書 本 文

萬病一毒之説
世人以一毒見一箇之事爲

人身所固有之毒愚按此
説誤也一毒之一總一之一而
飛一箇之一其例如左説文
説文日初大始道立於一造分
天地化成萬物大學自天
子以至於庶人壹是皆以脩
身爲本史記禮書總一
海内前漢書描霍光傳作
總壹又一二三作壹貳參
又梵書有萬法一心之語是
亦一對於萬總一之一也今
不暇枚舉其他押可知
華岡青洲震
右門人某請予説爲書也

注

○萬病一毒之説

吉益東洞の説。其の「萬病一毒論」に云う、「萬病一毒、衆藥皆毒物。以毒功毒、毒去體佳、初無損益於元氣也、何補云乎哉。」

○世人以一毒見一箇之事爲人身所固有之毒

「事」の字、判読できず。文脈からして「事」の字か？あるいは「所」か？文法的に見れば、この文を「以～爲～」の構文と取りたくなるが、それでは文意不

飛一箇之一 例如九說文
 說文曰初大始道立於一造分
 天地化成萬物大學自天
 子以至於庶人壹是皆以脩

萬病一毒之說
 世人以一毒見一箇之毒為
 人所不固有一毒思攝此
 說誤也一毒之一總一之而

亦一著於萬總一之一也今
 不暇枚舉其他押可知
 右門人某請予說為昏
 華岡青洲震

身為本史記禮昏總一
 海內前漢昏霍光傳作
 總壹又一二三作壹貳叁
 又梵昏有萬法一心之語是

圖1 華岡青洲自筆「萬病一毒之說」原文

通。「見」の字を、和習的用法と見なし、「看做」の意に取った。

○飛一箇之一

「飛」は「非」に通じる。『説文通訓定聲』「飛，假借為非。」

○説文説文曰，初大始道立於一，造分天地化成萬物。「説分」二字，誤りて重複す。

『説文解字』卷一上「一」，「惟初大始，道立於一，造分天地，化成萬物。」

○大學自天子以至於庶人壹是皆以脩身為本。

『大學』經一章「自天子以至於庶人，壹是皆以脩身為本。」朱子注「壹是，一切也。」

○史記禮書總一海內。

『史記』禮書「故德厚者位尊，祿重者寵榮，所以總一

海內，而齊整萬民也。」

○前漢書霍光傳作總壹又一二三作壹貳參

『漢書』霍光傳「天子所以永保宗廟總壹海內者，以慈孝禮誼賞罰為本。」

○梵書有萬法一心之語

『大乘起信論』卷上「一切諸法，皆由妄念，而有差別。若離妄念，則無境界差別之相。是故諸法，從本已來，性離言語，…究竟平等，永無變異，不可破壞。唯是一心，說名真如。」

○是亦一對於萬，總一之一也。

「是亦」は和習による誤用。漢語文法に則れば，正しくは「亦是」に作るべし。

○其他押可知

「押」は和習による漢字の誤用。正しくは「推」に作

るべし。

書き下し文

萬病一毒の説

世人は、一毒を以て一箇の事と見、人身の固有する所の毒なりと爲す。愚、按ずるに此の説は誤れるなり。「一毒」の「一」は「總一の一」にして、而して「一箇の一」にあらず。其の例は左の如し。『説文』に曰く「初め大始に、道は一に立ち、天地造分し、萬物を化成す」と。『大學』に、「天子より以て庶人に至るまで、壹にこれ、皆、脩身を以て本と爲す」と。『史記』禮書「海内を總一す」と。『前漢書』霍光傳には「總壹」に作る。又た「一二三」は「壹貳參」に作る。又た、梵書に「萬法一心」の語あり。これまた「一」を「萬」に對し、「總一の一」なり。今、枚擧に暇あらず。其の他は押して知るべし。

華岡青洲、震

右、門人某、予に説かんことを請いたれば、ために書す。

現代語訳

萬病一毒の説

世の人々は、「一毒」なる概念を、一箇の事象と見なし、それをば人の身体に固有する毒であると見なしている。私どもが考えるに、この説は誤っているようである。「一毒」の「一」は「總一（＝すべて同一に）の一」であって、「一箇（＝ひとつ）の一」ではない。その用例は以下のとおりである。『説文』に、「初め大始に、道は一に立ち、天地造分し、萬物を化

成す」とあり、『大學』に、「天子より以て庶人に至るまで、壹にこれ、皆、脩身を以て本と爲す」とあり、『史記』禮書「海内を總一す」とあり、その連語を『前漢書』霍光傳には「總壹」に作っている。また「一二三」は「壹貳參」に作るから、同じ用例と見なしてよい。また、梵書に「萬法一心」の語がある。これもまた「一」を「萬」に對しており、「總一（＝すべて）の一」である。今、枚擧に暇ない。其の他は推して知るべし。

華岡青洲、震

右、門人某、私に説明を求めたので、彼のために記した次第である。

考 察

華岡青洲は、吉益東洞の子息、吉益南涯の弟子にあたる。「萬病一毒之説」は、華岡青洲自筆本であり、門人が吉益東洞の提唱した「萬病一毒論」の解説を求めてきたため、自分自身で古典文学の文章を引用し解説したものである。本書物を解説することにより、華岡青洲が儒学に深く通じていたことがわかる。本文中でも、「説文」、「大學」、「史記」禮書、「漢書」霍光傳の文章を引用して解説している。そのみならず、梵書「大乘記信論」さえも引用し解説している。

これらのことから、華岡青洲は、江戸時代後期の医学者として、極めて教養人であり、医学のみならず、儒学や仏典にまで通じており、その知識の深さに感心させられる。